診療科案内

皮膚科・形成外科

【診療の内容】

●当科は皮膚科疾患全般の診療を行っています。皮膚は外界から絶えず影響を受け、様々な皮膚疾患が生じます。また内臓疾患に伴って生じる皮膚症状もあります。当科では患者さんからの問診や皮膚症状をもとに、血液検査、皮膚生検、パッチテストを含む皮膚テスト、皮膚エコー検査など必要な精査を行い、正確な診断をもとに適切な治療を行うことが重要であると考えています。

●形成外科は令和4年度から常勤体制となりました。当科は皮膚良悪性腫瘍の切除をはじめとし、変形したり失われた皮膚組織を機能の回復だけでなく形状も正常に近い状態に再建し、社会生活の質の向上に貢献する専門外科です。

●皮膚科形成外科領域でお困りの際は、お気軽にご相談ください。

【皮膚科・形成外科医師紹介】

	専門分野	専門医
中島　杏奈	皮膚科全般	日本皮膚科学会専門医 日本皮膚免疫アレルギー学会会員
筧　　祐未	皮膚科全般	日本皮膚科学会会員 日本皮膚免疫アレルギー学会会員
前田　真紀	皮膚科全般	日本皮膚科学会専門医

	専門分野	専門医
葛城 麻実子	皮膚科全般	日本皮膚科学会会員
真柴　久実	形成外科学	形成外科専門医、日本形成外科学会再建・マイクロサージャリー分野指導医認定、皮膚腫瘍外科分野指導医
萬木　　聡	形成外科学	日本形成外科学会専門医

【外来診療担当表】

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
皮膚科1診	中島	中島	中島	前田	中島
皮膚科2診	筧	葛城	筧	筧	中島
形成外科	真柴	真柴		真柴	真柴　萬木

病気の話

皮膚の痒みについて

奈良県西和医療センター　皮膚科　中島　杏奈

痒みとは？

引っ掻きたくなる衝動を引き起こす不快な感覚と定義されています。

痒みはなぜ生じるのか？

皮膚の炎症や虫刺されなどを発端として、痒みを生じさせる物質や伝達物質が末梢神経を刺激し、脊髄を経由して脳に達して、「痒み」として認識されます。

痒みを生じさせる物質とは？

古典的なヒスタミンをはじめ、それ以外にも多数の物質が知られています。例えばアトピー性皮膚炎ではIL-4、IL-13、IL-31といったサイトカインが痒みをもたらしているといわれています。

皮膚掻痒症とは？

アトピー性皮膚炎や蕁麻疹など明らかな皮膚病変を伴わずに痒みが出現することがあり、このような状態を皮膚掻痒症と呼んでいます。

先述したように、痒みは、皮膚➡末梢神経➡脊髄➡脳と伝達されます。皮膚に異常がなくてもこの経路のいずれかに異常があれば、痒みが出現するということになります。

皮膚掻痒症の原因は？

内臓疾患として腎臓疾患、胆汁うっ滞性疾患、内分泌・代謝疾患（糖尿病なども）、骨髄増殖性疾患、リンパ腫などの血液疾患などがあります。また薬剤や乾燥肌によるものもあります。

皮膚掻痒症の治療は？

保険適用:抗ヒスタミン薬、鎮痒性外用薬、ワクシニアウイルス接種家兎炎症皮膚抽出液（注射 ノイロトロピン®）などがあります。ヒスタミンが原因でない場合は頻用されている抗ヒスタミン薬は無効である可能性があります。

保険適用外の治療法もあります。先述したような内臓疾患や薬剤など原因がないか確認の上、治療を行っていくことで難治な痒みを改善することが可能と考えます。

原因がわからない痒みでお困りの際は、一度皮膚科を受診されることをお勧め致します。

痒みをきたす薬剤	
オピオイド	モルヒネ、ヘロイン、コデイン、コカイン
神経作動薬	ベンゾジアゼピン系、メプロバメート、カルバマゼピン、イミプラミン、バルビタール系
抗マラリア薬	クロロキン
消炎鎮痛剤	フェノブロフェン、アスピリン、NSAID s
化学療法薬	ブレオマイシン
心血管作動薬	カプトプリル、エナラプリル、クロニジン、アミオダロン、ドブタミン、キニジン、ジキタリス製剤
利尿薬	フロセミド、ヒドロキシクロロチアジド
抗菌薬	βラクタム系、リファンピシン、ポリミキシンB
ホルモン剤	プロゲステロン、エストロゲン、経口避妊薬、デキサメタゾン
その他	ヒドロキシエチルスターチ、エトレチナート

参考文献

- 佐藤貴浩、ほか：日皮会誌130（7）：1589-1606, 2020
- 藤井正徳：日皮会誌132（4）：633-637, 2022
- 端本宇志：マルホ皮膚科セミナー276：34-38, 2022

病気の話

難治性皮膚潰瘍（下腿潰瘍、壊疽）

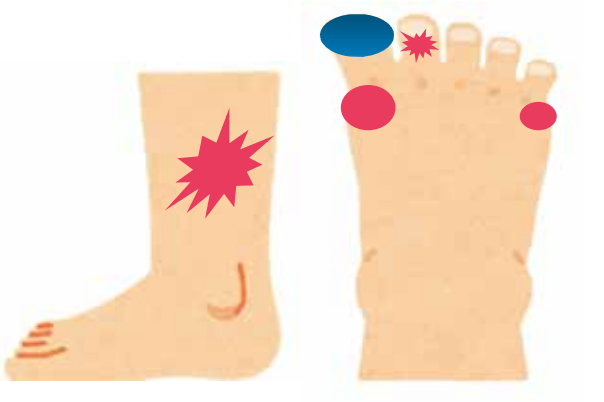
奈良県西和医療センター・形成外科　真柴　久実

「足に傷ができてなかなか治りません」と受診されることがあります。

傷は基本的には外力により発生し、自然に治っていきますが、足に生じる傷は、時に誘因なく生じたり、いつまでも治らずどんどん拡大したりすることがあります。

このようになかなか治らない傷を難治性皮膚潰瘍と呼んでいます。

足のキズの原因はひとつではなく、様々な原因があります。それぞれの原因によって傷の治療方法もちがったものになります。



種類と原因は？

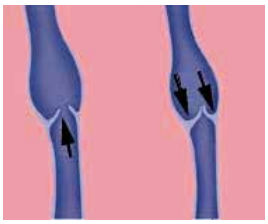
血管の病気が原因

動脈性

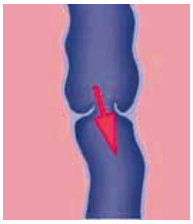
足の動脈がつまってしまうことで傷が生じ、治らなくなります。

静脈性

足の静脈のはたらきが悪くなることで、むくみが生じ傷が繰り返しできます。



正常



逆流

ほかの病気が原因

糖尿病

糖尿病が原因で動脈がつまったり、感覚がないため傷ができても気づかずに放置して感染を引き起こすことがあります。

膠原病

膠原病による血行障害や、治療のために内服しているお薬で傷の治りが悪くなることがあります。

皮膚がん

足に生じた治りにくい潰瘍が実は皮膚がんだった、ということがあります。

どんな検査をするの？

ABI : ankle brachial index（足関節上肢血圧比）

SPP : skin perfusion pressure（皮膚灌流圧）

下肢超音波検査

足の血流や血管の状態を調べる検査です。

難治性皮膚潰瘍（下腿潰瘍、壊疽）

画像検査　骨や周囲の状態を調べます。

皮膚生検　皮膚の状態を調べます。

いろいろな検査を組み合わせて傷の原因を調べます。

どんな治療をするの？

軟膏治療

皮膚潰瘍の治療には、菌を抑えるもの、肉芽をもりあげるもの、血流を改善するものなど様々な効能のある軟膏を使用します。傷の状態によって軟膏の種類を変えて治療していきます。

原因に対する治療

血管が原因の場合には循環器内科、心臓血管外科と連携をとり、血流を改善しながら治療を行います。
糖尿病については内分泌、糖尿病内科にて血糖コントロールを行ってもらいます。
皮膚がんの場合には皮膚科とともに治療を行います。

外科的治療

原因に対する治療をおこない、軟膏治療でも治らない場合には、壊死組織を取り除いたり、傷の部分を新しい皮膚で置き換えたりする外科治療が必要になります。

適切な治療を早く開始することが重要です。
足のキズの治りが悪いな、と思ったら形成外科を受診してください。

小児科

【診療の内容】

小児科は「こどもの総合医」として、こどもの生活の「質」と「安心・安全」を確立することを目指しています。そして、すべてのこどもの病気や健康をみることが小児科医の役割です。そのため、小児科医には幅広い知識とそれに対応する能力が必要とされますが、外科的治療の必要な疾患や外傷など小児科だけで全ての医療を行うことは困難です。そのために、専門科や他の医療機関とも連携して治療を行うことも大事であり、必要な場合には適切にご紹介させていただきます。当科ではこどもとご家族が元気で笑顔になっていただけることを目指しています。

【西和医療センター小児科の特徴】

こどもの総合医として総合的な診察に加え、小児循環器専門医による循環器疾患、臨床心理士と協力しながら心身症や神経発達症、アレルギー疾患の専門医療に力を入れています。

アレルギー診療に関して、アレルギーがあると生活が制限されることがありますが、正しい診断に基づいた適切な治療と管理を行うことにより、不必要な制限を防げると考えています。アトピー性皮膚炎に関しては、スキンケアや外用療法に加えて新規治療薬の検討、食物アレルギーに関しては食物経口負荷試験（実際に食べて症状の有無を確認する検査）や安全に行える経口免疫療法（自宅で症状が出ない範囲で食べることで食べられる量を増やしていく治療、アレルギー症状の出現リスクに注意が必要です!）、実施可能な年齢では呼吸機能検査も行いながらの気管支喘息管理、アレルギー性鼻炎に関しては舌下免疫療法（スギやダニに対する体質改善を目指す治療）など、アレルギー専門医によるエビデンスの高い診療を心がけています。

【小児科医師紹介】

	専門分野	専門医
吉澤　弘行	小児循環器	日本小児科学会専門医・指導医、日本小児循環器学会専門医、臨床研修指導医
西山　敦子	アレルギー、小児科一般	日本小児科学会専門医・指導医、日本アレルギー学会専門医
田口　真輝	心身症、発達障害、てんかん、小児科一般	日本小児科学会小児科専門医

	専門分野	専門医
西岡　仁美	感染症、小児科一般	日本小児科学会小児科専門医、Infection Control Doctor(ICD)
池田　衣里	アレルギー、小児科一般	日本小児科学会会員

【外来診療担当表】

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
一診（午前）	田口	池田	田口	西山	吉澤
一診（午後）	田口	吉澤（循環器）	田口	西岡（予防接種）	吉澤
二診（午前）	吉澤	西山	西岡	池田	田口
二診（午後）	西山		竹田（神経）	池田（検診） 第4週のみ榊原	田口

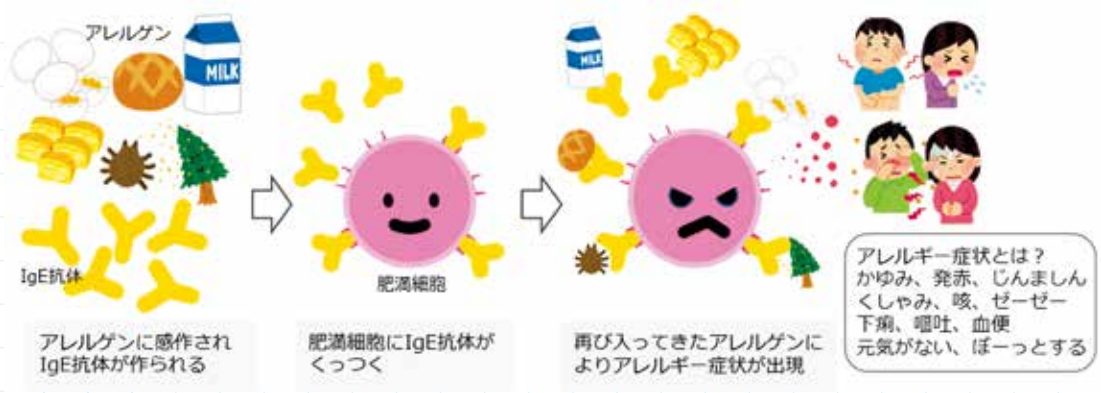
病気の話

小児のアレルギー疾患について

奈良県西和医療センター　小児科　西山　敦子

アレルギーはどうしておこるの？？

人間の体には、ウイルスや細菌などの異物が侵入してきた時に、それらを攻撃・排除する「**免疫**」と言う働きがあります。一方、食べものは人間にとって異物ですが、食事で食べたものは体に取り込まれて栄養になり体に受け入れられます。これを「**寛容（かんよう）**」と言います。ところが、「寛容」が十分に働かず、本来は体に無害なはずの食べものなどを異物と判断し、逆に「**免疫が過剰に働く**」ことがあります。これを**アレルギー**と言います。



アレルギーに大きく関係するのは「**IgE抗体**」と「**肥満細胞**」です。IgE抗体はアレルギーの検査でよく調べられるものですが、その「IgE抗体ができること」を「**感作**」と言います。アレルギー反応を起こすのは、食べもの、ダニ、花粉、動物、カビなどで「**アレルゲン**」と呼ばれます。アレルゲンに感作された人の体に再びアレルゲンが入ってくると、アレルゲンとIgE抗体がくっついて、肥満細胞に働き、アレルギー症状を引き起こす物質が放出されます。その結果、人間にとって不都合な症状（＝**アレルギー症状**）である**かゆみや発赤、じんましんなどの皮膚症状、くしゃみや鼻水、咳やゼーゼーなどの呼吸器症状、下痢や嘔吐、血便などの消化器症状**などが引き起こされます。

アトピー性皮膚炎ってどんな病気？

皮膚は体と外とを隔てる最前線で、正常な皮膚は保湿因子によって皮膚バリア機能が保たれ、体の外からの刺激やアレルゲンなどが入ってこないように人間を守っています。一方、湿疹やアトピー性皮膚炎があると、皮膚バリア機能の低下により外からの刺激やアレルゲンなどが簡単に皮膚の中に

入ってきてしまい、その結果、炎症は悪化し、**IgE抗体**が作られ**アレルゲンの感作**が進みます。

アトピー性皮膚炎の治療は①炎症を抑える治療、②悪化因子の除去、③スキンケアの3つを中心に行います。うるおいを補って皮膚バリアを改善すると、アレルゲンの侵入や湿疹の再燃を予防しかゆみを抑えることにつながります。そうして、外から入り込んでくる外界からの刺激は少なくなりアトピー性皮膚炎の悪循環から抜け出せるようになります。

●食物アレルギーってどんな病気？

食物に含まれるタンパク質などがアレルゲンとなり、アレルギー症状が引き起こされます。摂取後2時間以内に起こることが多く、原因食物は卵・乳・小麦が多いですが、年齢により特徴は異なります。以前は原因食物の除去が唯一の対処法でした。そのため、血液検査でIgE抗体が陽性の食べものは除去するという治療が行われていました。しかし、現在、**有効な予防法があることや、IgE抗体が陽性でも食べられる場合が少なくないことがわかってきています**。

現在わかっている**予防法**は、湿疹のあるバリア機能の低下した皮膚に生活の中で出てくる環境中の食物アレルゲンがくっつくと食物アレルギーのリスクが高まるため、**湿疹を治療し、湿疹のない状態を保ち、離乳食を開始**することです。離乳食の開始や特定の食べものの摂取を遅らせることはすすめられず、早めの離乳食開始が食物アレルギーの発症を減らすことがわかっている食べものもあります。

しかし、完全に予防できるわけではなく、家族歴がなくても、湿疹の既往がなくても食物アレルギーを発症することもあり、食べられるかどうかの診断はとても大事です。症状が出る食べものでも、加熱・加工によって症状なく食べられるものや、少量なら食べられることがあります。そうした“食べられる範囲”を正確に判断するために、病院で実際に食べて症状の有無を確認する検査「**食物経口負荷試験**」が必要になる場合もあります。

小児のアレルギー疾患について

POINT 新しい治療について

乳幼児期の食物アレルギーの多くは成長とともに食べられるようになります。そのような場合には、食物経口負荷試験を行い、安全に食べられる量を確認し、少しずつ食べて、食べられる量を押し上げていく**食事療法**があります。少量でも症状が誘発される場合は、経口免疫療法という専門医療機関で行われている治療法もあります。

POINT その他のアレルギーについて

新生児乳児消化管アレルギー

新生児から乳児期に主としてミルクや卵黄、小麦などが原因で、摂取後1～4時間後に嘔吐・下痢・血便などの消化器症状を起こすIgE抗体と無関係におこり、通常のアレルギーと症状が異なるため気づかれにくいです。

花粉-食物アレルギー症候群（PFAS）

花粉症があると、特定の果物や野菜を食べると口の周りの赤みや口の中の腫れ、口の中のピリピリ感やイガイガ感などのアレルギー症状が起こります。基本的に口の中の症状のみですが、アナフィラキシーにまで進むこともあります。花粉で作られたIgE抗体が、見た目は全然違うが、アレルゲンの構造が似ている果物や野菜に反応して起こります。

食物依存性運動誘発アナフィラキシー

ある特定の食べものを食べた後に運動をすることによってアナフィラキシーが生じます。特定の食べ物を食べたのみ、あるいは運動のみでは何も起こりません。小麦、エビなどの甲殻類、果物などが原因となることが多く、摂取後2時間以内に運動すると症状につながります。ただし、特定の食べものを食べて運動すれば必ず起こるわけではなく、生活環境や体調、ストレスなどの変化も関与すると考えられています。

アレルギー疾患は、発症要因の除去に取り組みながら、「できるだけ早く気づくこと」と「適切な治療と管理により症状をコントロールしていくこと」が非常に重要です。気になることがあれば、病院でご相談されることをおすすめします。